



京の風彦根に吹く 彦根藩儒・龍草廬の手跡

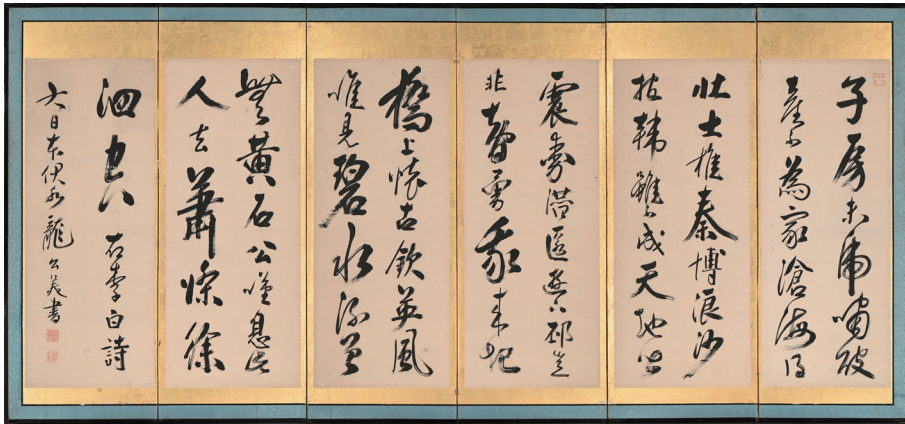


写真1 李白「経下邳圯橋懐張子房」龍草廬筆

当館蔵(川崎進弘氏寄贈)

子房未だ虎嘯せざるとき 産を破りて家を為さず 滄海に壯士を得て 秦に推す 博浪沙 韓に報いるに成らずと雖も 天地皆振動す 潜み匿れて下邳に遊ぶ 豈に智勇に非すと曰わんや 我圯橋の上に来り 古を懐いて英風を欽しむ 惟だ碧水流を見るのみ *李白の原文は「碧流水」 曾て黄石公無し 歎息す 此の人去りて 蕭條として徐泗空しきを 中国・唐代の詩人、李白(七〇一〜七六二)の五言詩の屏風(写真1)。

この地で謎の黄石老人から太公望の兵法書を授けられたことは有名な逸話として知られています。張良が劉邦(後の漢の高祖)の功臣となつて漢の統一に大きく貢献したのは、この後のことです。 この詩で李白は、張良の事績を語つてその英傑の風格を慕い、今はただ青い川の流れを目にするばかりで、黄石公の姿もない、張良が去つて帰らぬ人となつた後、この辺り一帯は空しくうら寂しい、と詠んでいます。 屏風の書を揮毫したのは、江戸時代中期の伏見出身の儒学者、龍草廬(公美一七一五〜九二)です。 京で詩社(詩人仲間の結社)を主催、上方を中心に各地に門人を抱えた、当時の京の代表的な儒学者と位置づけられています。書にも長け、よく求められました。宝暦六年(一七五六)、彦根藩儒として召し抱えられ、安永三年(一七七四)に嫡男・世華(玉淵)にその後を譲り、自身は彦根藩を致仕、京へ戻つ



写真2 「彦藩文学」印

て著述に専念しました。本作は、落款の印文「彦藩文学」(写真2)により、彦根藩仕官後の作と判断されます。 屏風第四扇一行目末の「英風」の「英」の文字の最後の一画が欠けています。これは、君主など、目上の人の諱(本名)の使用を避ける慣習「避諱」に拠るものと見られます。 本作の欠筆は、龍草廬が彦根藩に仕えた当時の藩主が井伊直英(なおひで)であったためと考えられます。 直英は宝暦十年(一七六〇)宝暦九年の説もあり)に直幸(なおひで)と改名しており、制作の下限を同年までに絞ることもできるかもしれません。 草廬の書は流麗と評されることしばしばですが、本作は雄渾とも表現できる堂々たる書風の大作で、制作時期は、気力漲る壮年期の作と考えるのが妥当でしょう。 【彦根城博物館 高木文恵】